

# 美ら海

(ちゅらみ)

作・栗木英章

## 登場人物

中根 里子	名古屋在住の主婦 写真家
浩一	その夫 自動車メーカーのロボット技術者
弘美	その一人娘 高校生 休学中
宮城 たえ	ひめゆり学徒隊の生き残り
喜久	宮城家の嫁 農協にパートで働く
悦子	喜久の長女 地元高校教師
栄子	次女 東京より帰郷する
萌	三女 嘉手納で看護師
佐々木 健	愛知から沖縄へ来たフリーター
新垣 真衣	高校生 悦子の教え子
ハナコ	もと従軍慰安婦との噂のおばあ
知念 ユキ	反ヤマトの考え方の主婦
ヨシおばあ	「辺野古命を守る会」のおばあ
平良おじい	反基地闘争参加のクリスチャン
安仁屋 俊	基地反対協議会 青年部リーダー
真栄城 秀人	那覇防衛施設局職員

## 1. プロローグ

遠く波の音。(これは劇中の主旋律となる)三線が流れる中、ジェット戦闘機の鋭い飛行音。ハナコがよろよろしながら次のような歌を口ずさんで舞台を横切る。

碧い海の彼方に  
幸せを呼ぶ神がいます フッフフ…

その名は ニライカナイ  
波に乗り 風に運ばれ  
辺野古へおいでなさるか フッフフ…

美ら海は燃えております  
血の赤さに染まっております  
みるくゆん 弥勒世や やがて… ハハハ…

哄笑と共にハナコは消える。

舞台の構成は宮城家の居間と縁側を基本とし、上手遠く、辺野古の海。半ばより  
単管やぐら、反対側に名古屋の中根家の 一部屋を設定。  
また壁面が布材などによって作られ、明かりの変化で海辺の 座り込みが見通せると奥行きが生じる。

時は二〇〇四年夏から二〇〇五年の六月ころまで。舞台は沖繩・辺野古と名古屋を往ったり来たりする。

## 2. 二〇〇四年八月夜 中根家

舞台一隅の中根里子に明かり。

里子 : 波の音が聞こえませんか？空耳かしら…ええ、日本海をのぞむ田舎育ちの私は、もともと海が大好きでした。七月に家族で思い切って沖繩へ行ったのです。夫は自動車メーカーの開発技術者で、愛知万博に新ロボットを出品すると毎日午前様、娘の弘美は、5月にはいって急に学校を休み始めて、引きこもり状態…。なんだか自分も沈んでゆくみたいで…。えいやあとばかり二人を追い立てて強引に出発したのです。(波の音…)レンタカーであちこちまわったのですが、沖繩の海は想像以上にきれいでした。美ら海ちゅらうみっていう響きがぴったりと言うか…。久しぶりに家族の絆を取り戻せたみたいで、私、夢中でシャッターを押しました。その組み合わせ写真が新聞社の公募展に入選したんです。写真を撮り始めて七年…。私は少し舞い上がりました。

里子 : ところが…  
浩一 : 里子。  
里子 : はーい。

舞台明るくなると、中根家の居間。

浩一はビールを呑みながら新聞を読み、弘美はぼんやり夜空を眺めている。ラ・ポールとネームの入ったロボット犬が置いてある。やがて、追加ビールを持って里子が登場。

里子 (コップを差し出す)

浩一 うん？呑む。

里子 いけない？

浩一 いや、珍しいなと思って。はい。

里子 これが最後のオリオンビール。(一息に呑んで再び溜息)

浩一 おれは、発泡酒でいいんだぞ。おいおい、元気印がどうした。  
里子 読んだでしょ。

浩一 何を。

里子 写真展の新聞評

浩一 すごいじゃない。地方版とはいえ、全国紙に載るなんて。もう、アマチュアの域を超えましたね、うちのカメラウーマンは。

里子 (浩一から新聞をとり) 「素直な写真だが、無心のように見えて幸せの押し付けの感じが嫌味……」

浩一 まあ評論家はそういうことを言いたがるもんだ。

里子 でも……

浩一 俺たちのロボットだって、やっと人間の動きを幾つかできるようにしたのに、一歳の子供にもかないませんね、とのたまう。今に見ておれ　　ってんだ。なあ、ラ・ポール。(ロボット犬の前に立つと

里子 啼く) がんば　るべえ。

浩一 でも……

里子 でもはでもでも、里子のもは？

浩一 やつぱり、そういうところ、あるのかな。

里子 押し付けるような……幸せ、か。

浩一 もう一つの入選作は、基地の写真でしょ。私が、車の中でぼんやり眺めてただけの基地をすくくリアルに撮ってある……。

里子 名護の海岸で、弘美がシャッター押してたな。

弘美 (アルバムを開いて) これね。NOBASE、辺野古に海上基地をつくるな……

里子 ……(ポツンと) 雨……

弘美 何言ってるの、星が出てるでしょ。

里子 明日——

弘美 明日、わかるの？

里子 風がにおいを運んでくるもの。

弘美 へえ、雨のにおいを——

里子 雨降ると、おばあさんたち、可哀想……。

弘美 おばあさんたちって……(写真に眼をおとし) ああ、座り込んでる人たち、か。

里子 ……

弘美 ……辺野古、辺野古、——

里子 おい、

浩一 辺野古か。

里子 へんなこと考えるなよ。

浩一 へんなことって。

里子 干潟へ出かけて、埋め立て反対。里山へ出かけて、万博反対。

浩一 沖繩の不幸をにわかには背負うなよ。　　また突発性正義感を出して、

里子 あなたも沖繩の今を不幸と感じてる。

弘美 観光と基地収入で成り立つ島ってのは、幸せとはいえないだろうな。

里子 ……

弘美 薬のまなくちやね。

里子 いい。

弘美 いいって、

里子 (横になりつつ) このまま、眼を覚まさないでいられたら——

弘美!

里子 馬鹿なこと言うもんじゃない。

浩一 波の音が……する……ざざあ……ざざあ……

弘美。

浩一 (弘美の座ってたところに置いてあるスケッチブックを手にして) これ、沖繩の絵か。

里子 そうみたい。

浩一 空が黒くて、海が赤いんだ。

里子 ……弘美の心に映ったままでしょ。私の平凡だけど、ささやかな幸せという枠の中の幸せの写真と

弘美の絵!

浩一 君は君でいいじゃないか。

里子 私もそう思ってた。でも……でも。

浩一 見る人が「ああ、きれい」と一言つぶやいて去る……うまく言えないけど……これで一生過ぎていいのかな。

浩一 また、たかが写真でオーバーな。

里子 (浩一を見つめる)

浩一 いや、言い方が悪かった。考えすぎるな。

里子 (写真に見入る)

浩一 明日、東京早いんだ。新エネルギー産業技術総合開発機構専門委員会、長い名前の会議。だから……とりあえず寝る。

里子 (小声で) どうする。

浩一 うん？

里子 (弘美を見つめて) これから。もうすぐ二学期よ。

浩一 とりあえず見守るより他ないだろ。

里子 ……とりあえず見守って、とりあえず仕事に流されて、とりあえず……その先どうなるの。

浩一 あのなあ、とりあえず——

里子 とりあえず？

浩一 ビールでも、でもでも飲んで寝よ (去る)

里子 (ビールを飲み干して、ふと空を見上げる) ほんとだ、雲が出て

きた……

弘美のうなされる声。

里子 弘美、弘美。

弘美 ……行きたくない、行きたくない……

里子 わかっている。無理に行かせたりしないから、ね。

弘美 ……

里子 (手をとり) ほんとうよ。

弘美 (弱々しく頷く)

里子 (手の傷を見つめ) この傷、自分でつけたの？それとも誰かに——

弘美 (険悪な空気)

里子 (必死にだめて) ごめん、もう聞かない、ね。何？

弘美 私のスケッチブック。

里子 ああ、これね。(渡す)

弘美 (去る)

里子 (やがて立ち上がり、モノローグへ) 子供のことなら何でもわかってるつもりでした……。弘美は、もうあきらめかけていた時授かった娘なので、随分手をかけて育てたけど、ほんと素直に、いつも私たち親に なついていたんです……。なつく、へんな言い方ですね……。でも……。高校二年になってから急に黙り込むようになって……。 (雨が降ってくる) もう一度……。沖繩へ行ってみようか……。

雨、激しくなる。

里子 ロボット犬の鳴き声一つ。波音と共に三線が聞こえてくる。

近付いてくると、衝撃音とともに (空中へ

アウト。

やがて空中へリが

リの墜落音 ホリゾン트가赤く染まり、カット

### 3. 二〇〇四年九月 夕方 辺野古 宮城家へ

下手、旅行バッグを持った里子に明かり。

里子

私は一人沖繩へ向かいました。沖繩のどこへ。実は行き先を定めて

いたわけではありません。

多忙な夫と不登校の娘を置いてのためらいはありました。できれば生々しい現実と遭遇せず、美ら海とだけ対面して沖繩と区切りをつけたいという思いもありました……。ただ「無心に見えて幸せの押し付け」と批評された私の写真と、空が黒く海が赤い弘美の沖繩。「たかが写真」、という夫の言葉にもひっかかりつつ、やはりカメラは持って、沖繩に向かったです。(飛行機の走行音) たまたま那覇空

港で知り合った宮城栄子さん

上手に栄子が浮び上がる。

栄子 私、宮城栄子。あなた観光旅行？

里子 ええ。

栄子 戦跡めぐり？

里子 ええ。

栄子 ダイビングじゃないよね？

里子 ええ。

栄子 今日の泊まりは？

里子 まだ、決めてないんです。

栄子 うちへ来ない？

里子 え？

宮城栄子が下手へ。

里子 たまたま那覇空港で知り合った宮城栄子さんが戻る故郷へと同行したのです。そう、そこが名護市辺野古と聞いて、はいと返事してしまっただけです。弘美の横顔が浮かびあがりました。

栄子 ああ、なつかしい。

里子 久しぶりなの。

栄子 7年ぶり。わけありだね。ガジュマル。

里子 あれね。

栄子 神木なの。それとこの匂い——

里子 あの、大丈夫でしょうか。

栄子 何が？

里子 私のような者が突然お邪魔して。

栄子 大丈夫。ウチナはこの家でも来る人皆メンソール、ふふふ……

里子 え？

栄子 正直言うとおね、東京からバツ一で出戻りする身。連れがいた方が、

私一人に集中しないから

里子 ありがたいの。途中でやっぱり民宿へなんていわないでね。

栄子 それはもう——

里子 今は多分家には誰もいないでしょうけど。うちの婆ちゃんね、ひめゆり学徒の生き残りだからね。座り込んでると思うわ、辺野古の海を渡さないって。平和にかける気持ちの人が人一倍強い。死ぬまで持ち続けるでしょう、同級生たちへの負い目とでも言ったらいいかな。

遠くスピーカーを通じて、アピールなどが風に乗って届く。

立ち止まり、耳をか

たむける里子。

栄子 やっぱり基地反対の支援に来てくれたんでしょ。私がベラベラ話し続けたから言いそびれたのね。

里子 いえ、ほんとうに目的なしの、写真を……

栄子 ほんと？ま、いいわ。誰も話したくないこと抱えてるものね。ねえ、ここで私を撮って下さる。

里子 はあ——

もうこんな厚化粧することないからね、その記念に。

里子はカメラを準備する。

栄子 (歌いつつポーズをとる) ♪かなあみのむこうに、小さな春をつくる うとタンポポ  
校歌ですか。

里子 小学校のとき覚えた反戦の歌。♪かなあみの外にも、小さな春をつくる うとタンポポ 光色のタン  
ポポはかなあみがあっても かなあみがなくても 沖縄中に春をふりまいたでしょう

シャッター音

栄子 (少し涙ぐんでいる)  
里子 栄子さん……  
栄子 (決然と) 行きましょ。

舞台は栄子の実家、宮城家となる。  
洗濯物を取り込んでいる喜久。真衣がそつと庭へ来る。

喜久 栄子、か。  
真衣 あの、先生は——  
喜久 ああ、悦子ね。もうぼつぼつ帰ると思うけど、あがつて待つとればいいさ——  
真衣 また来ます。  
喜久 名前は——  
真衣 いいです。(走り去る)

洗濯物を固めて台所へ去る。そこへ栄子と里子が着く。

栄子 母さん、母さん——

台所から喜久。

喜久 おう、栄子。急な話でびっくりするさ。  
栄子 この方、友達の中根里子さん、名古屋からみえたの。  
里子 よろしくお願ひします。  
栄子 我が宮城家を支えているゴツドマザー、喜久。  
喜久 どうも、ゆっくりしてください。それで、  
栄子 それで、里子さん。二、三日泊めてあげたいの、いいでしょ。  
喜久 こんな田舎家ですが。  
里子 お世話になります。  
喜久 それで、  
里子 それで、荷物は。  
喜久 びっくりしたさあ。布団やら、服やら下着やらが宅配でこつそり。みんな離れへ置いといたが。手紙のほうが後から届いて。一体全体どうしてこんなことに——  
栄子 性格の不一致。母さんのように逃げられたんじゃないからご心配なく。じゃ二人で離れをつかうね、あがつて。  
里子 でも……  
栄子 いいから、いいから。  
里子 お世話になります。(と、あがる)  
喜久 どうぞ。ちよつと栄子——、先様へは何かごあいさつ——  
栄子 いいのいいの。これで、おばあが来て、悦子姉がきて、萌が休みに帰ってきて、一人一人に事情を話すのは大変でしょ。だからみんなそろつたときまとめて記者会見します。なんだつたら近所のおじおばあもみんな集めてね。  
喜久 ええ年して何ばかなことを——  
栄子 まだ三十を、ちよつと越えたばかり。晩ごはん、久しぶりに本場のゴーヤチャンプルよろしくね、さつ。  
里子 はい。(と、奥へ)

栄子は里子と離れへ去る。

喜久 ふとん干してあるからな。(と、奥へ)

ふらふらという感じで、ハナコが入り込んでくる。

ハナコ おおい、なんぞ食い物ないか……誰もおらんか……(つぶやく) 天皇一つ、パカニスルナ……(歌いつつ去る) 育ていらん親ぬゆでいわんなちやが花ぬまちうるち哀しみていよ……(これは琉歌で意味

は、「育てられる親がなぜ生んでくれた。あげくに花街でみじめな想いをのせて」である。」

入れ違いに悦子と真衣が来る。

（ハナコを振り返りつつ）ハナコおばあ、どうした。（真衣へ）さっ、入って。急いでるから——

じゃ、そこで。（縁側へ座らせる）二学期に入って早々に休むし、家に電話したら姿消したいうから心配してたのよ。

すみません。

父さん母さんにも黙って、どこへ行ったの。

東京——

東京！？何しに——

オーデイション受けに——

何の。

芸能プロダクション。

真衣、あなた、沖繩の短大へ進むって言ったじゃない。そのつもりで勉強もしてきたんでしょ。私、このまま田舎で埋もれたくない。

家政学勉強して、進路は色々考えられるのよ。

もう勉強なんかしたくない。

勉強できるのは若いうち。

タレントも若いうちしか挑戦できない。

：真衣が踊りや歌のうまいことは認める。でもね、それで自立できるのはほんの一握りなの。好きな踊りと歌ならどんな辛いことでも辛抱できる。

お父さんやお母さんは。

親は関係ありません。

関係なくはないでしょ。今あなたがこうしていられるのはご両親のおかげなのよ。冷静に考えたらわかるでしょ。

：：：  
きちんと話して、タレントになるの認めてもらったとして、沖繩にも

音楽事務所あるんだし。本土から沖繩のスクールに来る子だっていくらでもいるんだから。東京と決

めつけずに考えなさい。

ウチナーはイヤです。

なぜ。

ウチナーはアメリカカーの島です。大学にヘリが落ちてきても米軍以外現場へ入れないような、そんな

沖繩はもうごめんです。

一人前のことというじゃない。座り込んでいるおじいやおばあの前で言えるか。

：：

基地許さないって座り込んでるおじいやおばあの前で言えるか。

わったー、そういわれたら黙るほかないでしょ。沖繩の歴史を考えれ。沖繩の現実を考えれ。考えたら、ぬーならん（何にも出来なくなっちゃう）。若さを失わないうちに翔び立ちたいんです。

真衣。

自由になりたいんです。失礼します。

待って。明日から学校へ来るのよ。

——  
ご両親にきちんと話さない。

真衣は走り去る。立ち尽くして見送る悦子。

時間が経過。

縁に座り込む悦子。喜久が来る。

（悦子の姿に）あっ、びっくりした。

ただいま。

さっき教え子が訪ねてきたよ。

喜久  
悦子  
喜久

悦子  
真衣  
悦子  
真衣  
悦子

悦子  
真衣  
悦子

悦子  
真衣

悦子 今、会ったさー。  
喜久 先生も楽しやないね。  
悦子 進路相談。島の進路がはつきりしないからね、生徒も悩むわ。高三の二学期は気が重いな。  
喜久 あんたはいつも気が重い、気が重い。  
悦子 お気楽な栄子は帰って来た？  
喜久 知り合いの人と一緒に離れへ。  
悦子 ふふ…  
喜久 なんね。  
悦子 栄子の作戦。みんなから、あれこれ聞かれたくないための。  
喜久 そうかねえ。  
悦子 どれ、のぞいてやるか、傷心の東京帰りを。

悦子、離れへ去る。そこへ宮城たえと平良、ヨシが来る。

たえ りか、お茶なんぞ。  
ヨシ ありがとう。  
平良 じゃ、ちよこつとだけ。  
たえ かえつたよ。  
喜久 お帰りなさい。いつもご苦労様です。  
平良 喜久さんこそ。こうしてたえさんが座り込みできるのも、家を守って くれる人がおるからだよ。  
ヨシ そうだ。  
たえ お茶ぐあ、うさぎなさい。  
喜久 はい。平良さんとはお孫さんはアメリカへ行ったきりで。  
平良 はあ、息子夫婦もアメリカ留学した後は大阪です…  
喜久 お一人ではおさびしいねー。  
平良 浜に出れば、お仲間がたくさんいらつしやる。心には神様がいつも一緒にくださっています。  
喜久 (お茶を入れつつ) いつまで続くんかね。  
たえ 白紙撤回されるまでさ。  
ヨシ そうだ。  
喜久 はい、どうぞ。(お茶を出す)  
平良 今日で座り込み二千六百三十九日、八年足すことの——  
ヨシ 百四十日。  
平良 うん。長い闘いだな。  
たえ なあに、59年、続いているさ。  
喜久 ハナコは寄ったか。  
たえ まだ。  
ヨシ テントに姿見せておったな。  
平良 すまんが、にぎりめし二つばかりこさえてくれ。(平良に) 帰り道、届けて下さらんか。  
たえ わかった。ハナコおばあはこのおかげで生き延びておられる。  
平良 沖縄戦をくぐりぬけた仲間やさ。  
たえ どこからたどり着いたか知らんが、あの小屋が終のすみ家だろう。  
平良 そこへ離れから、悦子、栄子、里子が登場。

悦子 ご苦労様です。  
平良 お茶よばれてます。  
栄子 こんばんは。  
ヨシ 栄子ね。  
栄子 はい。  
ヨシ まったく、見違えてしまったさ。  
栄子 おばあ——  
たえ もどつたね。  
栄子 うん。  
たえ こつちへおいで。

栄子 友達と一緒に――  
たえ こっちへおいで。(栄子、たえの胸で泣く)  
たえ ようきた。  
悦子 おばあの前では作戦変更、泣きの手でできたか。

一同は、しばし二人を見守る。

里子 すみません、突然お世話になります。中根里子と申します。名古屋から参りました。  
たえ ゆっくりしていくとええ。座り込みに来るとええ。  
里子 はい。  
たえ 沖繩がわかる。  
ヨシ ほんとの沖繩がさ。  
はい。  
栄子 今日は浜で騒ぎがあったの？大きな声が聞こえてきたけど。  
ヨシ あれは、防衛施設局阻止の実地訓練さ。  
たえ ごぼう抜きにされないためのな。  
ヨシ 面白かったさ。  
平良 遠来のお客さんが来てござる。歓迎の宴を開かにかいかな。  
たえ そりやええ。  
平良 歌でも歌うか。

そこへ安仁屋俊が走りこんでくる。

俊 ヨシおばあ、たえおばあ。  
たえ どうした。

俊 いやいよあいつら、死に物狂いさ。防衛施設局は、明日の住民説明会、人数を制限し、よその地区のもんは締め出したと。

そんなら、わしら、会場を十重二十重に取り巻いてやる。

俊 ボーリング調査にはあいつらあ、不測の事態に備え500人の機動隊を待機させると。  
機動隊？

9月の6日準備作業、7日から作業船を出すと決定したようだ。

わしら、それば上回る数を集め、陸と港で阻止行動だな。

今日の訓練が早速役に立つさー。

その港だが、あいつら日米合同委員会に申請して、米軍基地からにする腹だと。

となると、海の上での阻止行動か。命がけになるなあ。

あいつらあ…

俊、その「あいつら」「あいつら」「あいつら」はよくないな。

言葉の暴力も戒めんとな。

すまんです。で、緊急に対策会議を開こうと。もう一度、集まってもらえんかなあ。

わかった、すぐ行く。

行こう。

じゃ私も。

これ、お願いします。(おにぎりを渡す)

平良おじいは、クリスマスチャンで、わしらがお盆休みの間中、座り込んでくれた。わしら、5日間のお

休みもらって元氣いっぱいだから、今日んところは休んでくれ。

ハナコおばあにおにぎりを届けて駆けつける。

そうか。

栄子！

俊：

再会の挨拶はあとまわし。俊、行くぞ。(ふと)お客さんも来るか。

どうする？

カメラがあるね。しっかりと写真を撮ってくれんね。

栄子  
たえ  
たえ  
たえ

里子 はい。  
喜久 おばあ、あとでにぎりめし届けます。

一同各々の形で出て行く。

栄子 俊、私も行く。帰ってからチャンプル食べるからね。ああ、それから泡盛も。(言いつつ去る)

残ったのは喜久と悦子の二人。

悦子 泡盛飲むって、何時に戻れるか、よう分からんのに。「にぎりめし届ける」って母さんの言葉も聴いちゃおらん。うらやましいくらいのお気楽さん。

喜久 …(ポツンと)ほんとに、いつまで続くのかねえ。

悦子 死ぬまで極楽トンボ。ありや一生よ。

喜久 座り込みのことよ。

悦子 ああ。あれも永久かな。(電話にて)もしもし、真衣のお母さんですか。私、担任の宮城です。あの、実は真衣が…

喜久は一人三線を弾く。波の音。

夜が更けてゆく。

#### 4. 3の翌朝 辺野古 宮城家

皆、昨夜の行動で遅く、寝静まっている感じ。やがて真栄城秀人が作業服姿で登場、中の様子をうかがっている。そこへ、カメラを持ち朝の散歩から里子が戻ってくる。

(里子を見つけ)あの…あれ!?

秀人 はい。  
里子 栄子じゃないですよ、ね。いえ、なにしろ十年くらい会ってないものですから。

秀人 まだ休んでますか。

里子 昨夜遅かったですから。

秀人 そんなに飲んだんですか。

里子 いいえ。辺野古沖に基地を作らせないための行動で。

秀人 栄子も出とるんですか。

里子 私、初めて知りました。随分ひどいことをするんですね。

秀人 …

里子 海底は貴重なサンゴで構成され、アマモ類が豊富でジュゴンのダイニングルームとも呼ばれる、沖縄県の自然環境保護区域ランク1の海なんですってね。あんなきれいな海に人殺しの基地なんて許せないと思いました。

秀人 …

里子 ごめんなさい。

秀人 …

里子 きれいな海と人殺しの島は、今に始まったことではないんですよ。

秀人 米軍が居座って60年。

里子 もっとずっと昔からの沖縄の、宿命でしょう。

秀人 はい。

里子 きれいな海を見もしない連中と、きれいな海しか見ようとしなない連中と。ヤマトンチュウのあなたは、どっちか。

秀人 私は。

里子 また出直してきます。

秀人 あの、ほんとにいいんですか。

里子 失礼します。

秀人 ごめんなさい。(中へ入り消える)

里子

秀人

里子

秀人は一旦帰ろうとして、安仁屋俊とバッタリ出会う。二人

ともにらみ合う。

俊 いよいよジュゴンを殺し、漁師を殺し、海を殺そうとするんだな。  
秀人 なに！

俊 辺野古の海に基地を作るとは、そういうことだ。今日の説明会には俺たちを排除する。機動隊を待機させる。キャンプシユワブを拠点にする。ほかにはどんな手を使って、おれたちを出し抜こうとしてるんだ。

秀人 俺たちには知らされていなかった。

俊 ゆくさー（嘘つけ）。

秀人 本当だ。口惜しいけど、俺たち事務方には情報がなかなか入ってこない。

俊 じゃ、防衛施設局と反対協の定期的な話し合いは何のためだ。こちらのガス抜きか。

秀人 そんなつもりはない。着地点を真剣に探っているつもりだ。

俊 基地をつくるか、やめるかに妥協なんかしない。いいか、おまえはこの間、辺野古へ移設させようとしている普天間基地は「安全だ」と言ったな。

秀人 ……

俊 言ったろう。

秀人 分かってる。その基地から飛び立った米軍ヘリが大学の構内に墜落して爆発炎上した。そんな危険な

俊 基地は辺野古にも普天間にもいらん、と。

秀人 被害は米軍ヘリの乗務員の三人が怪我しただけだなんていいわ けするなよ。

俊 周辺が住宅密集地で、病院や保育所、小学校に商店などが並んでも知ってる。もしそこへ墜落

秀人 したらどれだけ被害が出たかも。

俊 だったら。抗議集会に三万人が駆けつけたのは、沖縄県民の意思だということがわからんのか。

秀人 ……政府は六年前に閣議決定した。辺野古への軍民共用空港の建設は、知事が打ち出した県内移設案通り工事を進めようとしている。知事を選んだのも沖縄県民だってことが分からんわけではないだろう。

俊 おれもお前も、もともと海人うみんちゆだぞ。俺たちの海を俺たち自身が守らなでどうする。

そこへ、栄子が出てくる。

栄子 朝から大きな声で――

二人 栄子！（同時に言ってしまう、お互いをあらためて意識する）

秀人 秀人。

俊 ああ。

栄子 俺は昨夜もう会ってるからな。

秀人 久しぶり。

栄子 帰って来てたのか。

俊 そう、しばらくはここに――

秀人 しばらく……？

二人 相手の捺印を待ってる。ねえ、秀人は施設局の職員。

秀人 ああ。

栄子 ということは二人敵同士？

俊 ……

二人 高校野球のエアースとキャッチャー名コンビが。（笑い）

栄子 面白がることじゃないだろう。

俊 （なおも笑いつつ）ごめん、だっておかしいんだもの。どうやって喧嘩するのか。

秀人 勝ち負けの問題ではないだろう。

俊 ああ、負けはない戦いだ。

栄子 ともかく、正々堂々とね。

俊 変わったと思ってたけど。

秀人 変わったないな。

栄子 ……変わったわ……十年の歳月、取り戻せないもの。

二人、栄子をじっと見つめる。

栄子 嫌だ、素っぴんだから、あまり見ないでよ。  
俊 働き口、どうするんだ。

栄子 探す、家の世話になるわけいかなないもの。それともお嫁さんにもらっ

：

二人とも家庭があるもんね。

一人だ。

秀人 俺も。

栄子 ほんと——

喜久がやってきて——

喜久 二人とも朝ごはん食べてたらどうだ。

俊 俺今からテント行くから。

秀人 ぼくも職場へ——

喜久 そう、またゆっくり来てちょうだいね。(中へ入る)

俊 ということで、またな。

秀人 俺も。

栄子 ありがとう。

俊 野球部のOB会でもやるか。

秀人 俺はパス。

俊 反対派と飲んでちややばいか。

秀人 そっちこそおばあたちに怒られるだろ。

栄子 いい。そのうち自然と会うだろうから。

俊 そうだな、じゃ。

二人は別々の方向へ走り去る。栄子はある感慨に襲われて佇む。

栄子

(つぶやくようにオモロ唄はかましゆげん(外間守善訳)を唄う。

天に鳴響とよむ大主や (天をどよもす太陽よ)

明けもどろの花の (明けもどろの花が)

咲い渡り (咲き渡っていく)

あれよ見れよ

清らさ清りて (なんと美しいことよ)

佐々木健がリュックを背負い迷い込んでくる。

健 ちよっとお尋ねします。

栄子 はい。

健 座り込みはどこでやっとするんですか。

栄子 初めて？

健 はあ、方向がわからなくなつて——

栄子 一人？

健 はあ。

そこへたえがくる。

栄子 おばあ。

健 空港にも、名護にも、案内図があるはずじゃが。

たえ 船で来ました。地図とか案内図見るの、苦手なんですよ。まあ何とかなるだろうと。

たえ ここを右へ回り、橋の手前を左へまっすぐ進めば突き当たる。旗や看板が出とるからすぐわかる。

健 ありがとうございます。  
たえ 応援に来てくれたか。  
健 一応そのつもりで。  
たえ 特技は？  
健 は？  
たえ 特技——  
健 空手を少々（手を上げる）  
たえ わしらの闘いは完全非暴力だ。絶対手を上げるな。  
健 （前へ突く試技をする）  
たえ だめ。  
健 （蹴る試技）  
たえ 絶対だめだ。  
健 了解。（行きかける）  
たえ 今な、船の乗り手が足りねい、しばらくいるなら免許とって船の運転、手伝ってくれ。  
健 考えてみます。（走って去る）  
たえ （見送り）ちよつと軽っこいかな。

二人、中へ入る。

喜久 おばあ、飯の仕度が出来とる。栄子も、里子も。  
たえ ああ、ここでお茶をいっばい。  
里子 昨夜は最後まで帰らずに。  
悦子 みんなが無理するなど言っても聞かないんだから。  
たえ （一人言のように）無理しなくちや基地は作られてしまう。

電話が鳴るので喜久が出る。

喜久 もしもし、宮城ですが……ああ、萌、今度はいつ来るね……うん、うん、栄子も戻ってきたから久しぶりにみんなそろって……ああ、待ってる。（切つて）萌も来週には顔出すと。  
栄子 （里子に）妹、看護師なの。  
悦子 色気なしの三人姉妹。栄子はそうも言えないか。それが仇になって  
栄子 都会の毒に冒されて。  
悦子 毒のこともようしらんと、高校生の進路相談できないでしょ。  
悦子 あんたみたいな娘は——  
栄子 いないとは言いい切れない。  
悦子 ……うん。  
悦子 悦子先生はいつも背筋伸ばして。（里子に）家はね、姉と妹がおばあ様の血を受け継いで、私だけ半端者。  
悦子 それがなぜかおばあ様に可愛がられる。  
喜久 できの悪い子の方が可愛いもんだ。  
栄子 ひどい。

一同の笑い。

栄子 ……おばあ、なぜ語り部やめたの。ひめゆりの語り部をなぜやめたの？  
悦子 ……見学に来た本土の修学旅行生たちに「つまらん」と言われたんだって、ね。  
栄子 「つまらん」  
里子 授業で「ひめゆりの説明は退屈でつまらん」という英語の例文を出して、生徒に訳させたという先生がいたって。ニュースで言ってた。  
栄子 ひどいなあ……

たえ わしらは沖縄戦の被害だけじゃなく、加害の責任も語るようになった。  
悦子 アジアの侵略拠点だったという——  
たえ でもな・同級生の悲惨な死を共にしたわしらの気持の中にしつくりとはおさまっておらんかった。  
その隙間を若い人は感じたのだろう。それで……すまんが語り部をおりた。

立ち上がり、食事に奥へ去る。

栄子 重い現実——  
悦子 (出てくる) 行ってくる。  
栄子 気の休まるときなしね。  
悦子 重い現実には、休みはないから。里子、ゆつくりして行って。……栄子、あんたに話して欲しい生徒が  
栄子 いるの。  
悦子 毒を知る私に。  
栄子 聖女では説得し切れん。  
悦子 ええよ。  
悦子 (奥へ) 母ちゃん、行ってきました。

悦子は外へ去る。

栄子 さて、今日はキャンプへ行ってみようか。  
里子 キャンプ。  
栄子 キャンプ・シュワブ——あなたほんとに何しに沖縄へ来たの。  
喜久 行ってらっしゃいよ。沖縄が判るかもしれない。  
栄子 この村を取り囲んでいるアメリカ海兵隊の総合訓練場。弾薬庫に、細菌戦や化学戦用の貯蔵庫。人殺  
し兵器のオンパレード。ここに、飛行場を作れば、最新総合基地が完成する、という狙いは、半端も  
んの私にだってよく分かる。  
里子 いいんですか？  
栄子 ああ、大丈夫。危険なところまでは入り込まないから。そうでもないか、危険でないところはどこに  
もない、沖縄には。  
里子 栄子さん、いいんですか。  
栄子 私、一週間は充電期間。もう一度このゆるんだ眼に焼き付けてから再出発する。  
里子 はい。  
栄子 しつかり写真撮ったら。  
里子 ええ。(カメラを取りに奥へ)

栄子は片付け物を奥へ持って行く。喜久が農協の作業着で出てくる。

喜久 栄子、洗濯物干しといて。  
栄子 (戻ってきて) 母ちゃん。  
喜久 急いでるさ。  
栄子 ごめんなさい。  
喜久 みんなそろったところで記者会見するんだろ。  
栄子 もう一度、やり直すから。  
喜久 失敗は……一度はいいものさ。だけどな、取り返そうと思って無理すると、もういつぱんしくじるさ。  
栄子 ……うん。  
喜久 お客さん、頼んだよ。  
栄子 はい。

喜久も勤めに出て行く。里子が、「行ってらっしゃい」と言うが、米軍ヘリの爆音でかき消される。  
里子を残して——溶暗。

里子 辺野古の海はきれいでした。しかし、海は赤く燃えていました。なぜか弘美が描いた絵のように。

(テントからの報告)

俊 9月5日 台風直撃です。守る会の事務所は閉めました。

ヨシ 「台風で事務所が飛ばされそうになったら、わたたーが重しになっておくさー」(笑い)  
ユキ ただ、私たちが見くびっていけないのは向こうの動きだ。

俊 9月7日 防衛施設局が、ヘリ墜落事件以後初めて辺野古に来ました。

たえ わしら、朝6時には50人、7時には150人が集まった。

ユキ 普天間基地は危険だと思わないのか？危険？なら、なぜこの辺野古に危険な基地を持ってくる？

健 彼等は何も答えられない。

俊 9月9日 木曜日 ついにボーリング調査が強行されました。

ユキ 調査船は、沖縄南部の港からチャーターして。

たえ わしら座り込みに400名が結集。

平良 海上ではカヌー隊と抗議船が阻止行動。

健 作業戦はポイントブイ2本を打っただけ。1日目の完全な勝利だ。

俊 9月13日 火曜日 今日も調査船ができました。

平良 カヌー隊は、「潜水調査」を阻止。

健 沖合いの、引き潮になると人の歩けるリーフ上で作業の人影。

ユキ 「何をやっている！」

健 あわてて逃げ出す作業船。追走する抗議船。カーチェイスならぬボートチェイス。調査圏外に追い出す。

俊 今日も勝った！このことを明日につなげよう！

里子 私は赤い海に巻き込まれて行きました。

もう一度、この海に来なくてはと心に期していました。

## 5. 10月夜 名古屋 中根家

明るくなると、手紙を読んでいる弘美と、写真を見ている里子。浩一はパソコンに向かってる。

浩一 (ネット情報を見て) 敵は「漫才をするロボット」に「サッカーゲームをするロボット」「サルサやタンゴを踊るロボット」か…ああ、上からまたハツパがかかるなあ、

弘美 (手紙を読み終えて) 娘さんと一緒に是非おいで下さい。

里子 悦子さんという一番上の人が高校の先生でね、弘美のこと話したら会いたいなああって。ほら、この写真の人。

弘美 (アルバムに見入って) これは。

里子 みんなカヌーに乗って、基地の工事を阻止しているところ。

弘美 この人、おばあさん——  
そう。海はわたたーの生命の源だと言って、みんな必死なの。母さんも次はカヌーに乗ってみるつも

弘美 乗れるの!?  
里子 講習を受けてね。  
弘美 私も行きたい。  
里子 弘美……!  
浩一 おいおい。  
里子 なあに。  
浩一 とりあえず学校へ戻る方が先決だろう。  
里子 弘美はね、まず自分でやりたいこと見つけるのが先決だと言われたでしょ。  
浩一 そのカウンセラー確かなのか。  
里子 不安なら、あなたの会社の総合病院へ連れて行く。  
浩一 そんなことできるか。  
里子 主任技師の面子めんつがあるものね。

浩一はカッとして手元の本を振り上げる。

弘美は立って奥へ行くこうとする。二人はお互いを牽制して、  
を探る。

弘美へかける言葉

弘美 ごめんなさい。  
二人 ……  
弘美 ごめんなさい。私、いっぱい可愛がってもらったのに、期待にそえなくて。  
里子 そんなことない。  
浩一 そんなことない。あのな、母さんと喧嘩するのは、そのう、つまりは ……  
弘美 仲がいいから。そうね、喧嘩できる相手がいるって…羨ましい。  
里子 おい。  
弘美 私寝るから思い切り喧嘩してちょうだい。(去る)  
浩一 おまえが——  
里子 あなたが——

間。

浩一 つまらんこと言うからだ。  
里子 すぐ突っかかるからよ。

間。

里子 私、行きますからね。(弘美の去った方へ消える)

間

浩一 このロボットだって、施設の一人ぼっちのお年寄りの癒しになる。実験でも効果が立証されている、ラ・ポールなんだ。みんな科学の発展過程の一コマだ。万博では十五年後を想定して、人とロボットの共生をさぐる「プロトタイプロボット展」をやるんだ。技術テクノロジの究極目標は人類の幸せに決まってるだろう。そうだ、ロボット犬の方が気持がわかるんだ。(浩一もロボット犬の前に立つ)なあ、ラ・ポール、「心の橋」よ…

ロボット犬、啼く。

6. 11月夕方から夜、そして深夜にかけて。宮城家

——溶暗。

辺野古、宮城家。里子の撮った写真が数枚壁に掛けられている。ハナコが現れる。  
ハナコ 兵隊さん。どう、休憩していかない。安くしとくよ。兵隊さん。(横になる) 空が、きれいだよ……  
(小声で歌う)

台所の方から、料理皿などを持って喜久と里子が来る。

喜久 (一口つまんで) うん、いい味ついでる。  
里子 素材のままですし塩を——  
喜久 それでいいさ。沖縄の塩味は最高だから。ははは。写真撮りに来てるのに、料理の手伝いさせて悪いね。  
里子 何でも知りたいんです。知った上でシャッターを押そうと思って——  
喜久 この写真評判いいよ。今度農協で展示会するといいさ。  
里子 ありがとうございます。  
喜久 (ハナコに気付いて) ハナコおばあ、何してる。  
ハナコ 横になってるさ。

喜久と里子はハナコを助け起こす。

喜久 大丈夫？  
ハナコ 男がいっぱい迎えに来たさ。  
喜久 夢でも見てたの。今、包んであげるからね。(台所の方へ去る)  
ハナコ 夢じゃないさ、ヤマトンチュウもアメリカもいっぱい来てな。  
里子 戦争の時の——  
ハナコ 日本兵だめ、朝鮮<sup>ピ</sup>ー言つて踏み倒した。  
里子 朝鮮<sup>ピ</sup>ー  
ハナコ (だんだん記憶がよみがえってくる) 天皇一ツ、パカニスルナ！  
里子 ハナコさん。  
ハナコ 一、私共ハ大日本帝国ノ臣民デアリマス。一、私共ハ心ヲ合ワセテ天 皇陛下ニ忠義ヲ尽クシマス。  
日本兵は鬼、まだアメリカ兵の方がマシ。  
里子 ハナコさん、あなた、お話できる——  
ハナコ シー……時々だけね、たまーに(頭をさして) ここ、おかしい。(またぐ  
毒にやられた……フフ……ははは……) らをさして) ここの

喜久が食物を包んで持ってくる。

喜久 おや、楽しそう。  
ハナコ この人、やさしい。  
喜久 中根里子さん、名古屋からみえたの。  
里子 ……よろしくお願ひします。  
ハナコ わしが死んだら、お線香あげとくれ。ウートートウ ウートートウ

喜久は去って行くハナコにおにぎりを渡す。

喜久 驚いた？  
里子 ……少し。  
喜久 朝鮮から連れて来られた、従軍慰安婦のようだけれど……祖国にかえれず、そのまま戦後はアメリカ  
ーを相手に。詳しいことは知らない。平良さんの近くの小屋に住んでね、おばあが助けてやれって  
言うからずうっと。  
里子 ……  
喜久 さ、ぼつぼつ帰ってくるから支度を。  
里子 はい。

二人は夕食の段取りをする。そこへ、佐々木健がたえを背負い、萌が介助しながら飛び込

んでくる。

おばあ、しつかり。

おばあ！どうした。

話はあと。母ちゃん、椅子！

喜久と里子は椅子を。萌と健はたえをおろす。萌は手早く水を汲んできて薬を飲ませる。

おばあ、これ飲むと少し落ち着くから。

たえは薬を飲んで横になる。

喜久 医者を呼んだほうが――

少し様子をみてから。過労だと思うから。

なにしろテントでも一番張り切ってたけど、急に気分が悪いって。年寄りが張り切ってるから、健康だなんて、どうして言えるの。

すいません。

でもありがたい、すぐに水分補給してくれたからよかった。

ありがとうございます。

おばあ、気分はどう？

ああ、もうええ。

萌と喜久がたえの世話をしている間に  
ほんとにムチャするんだから。何か変な予感がしたのよ。実家へ来る前にテントへ寄ったら案の定。あたしって靈感がきくんだな――

萌と喜久がたえの世話をしている間に

健 (里子に) 愛知県だって？

ええ、名古屋から。

テントに飾ってある写真みましたよ、ここにも、すごいなあ。

あなたはずうっと――

一週間いて帰ろうと思ってたけど、気に入っちゃって。

若いから。

手羽先なんです。

手羽先？

風来坊、ははは、名古屋限定のジョーク。

(健に) お茶を。

(萌がにらんでるので) じゃ俺戻ります。おばあ、しばらく休んで。座り込みは俺たちががんばるから。

明日また行くさ。

待ってるよ。

待ってるよじゃないでしょ。殺す気、おばあを。

いえ、そんな。

しばらく静養。座り込みはしばらくだめだからね。

そうそう、だめだからね。失礼します。(去る)

何よ、あの男。おばあ、無理したら命はないよ。

：はあ：もうこれだけ生きれば、同級生のところへ行ってもいいさ。

おばあ！

追い返されるわ。基地もなくせんのに、こっちへ来るなって。

ははは：きついなあ。

おばあ譲りだ。

ああ、顔色が戻ってきた。

私、時々こちらでお世話になっている中根里子です。

里子

喜久

萌

たえ

喜久

萌

萌 聞いてるわ。なぜ、沖繩に来たのか、正体不明の不良中年だって。不良にはみえませぬよね。どちらかといえば優等生。私はこの家の末っ娘で看護師の萌です。よろしく願います。

里子 こちらこそ。ああ、母ちゃんが一人になったみたい。この世代が問題 多いのよね。祖国復帰に一番期待して、一番失望した世代。今は従順なのか、無気力なのか。

喜久 今は誰でもいい、早く孫を抱かせてほしい。

萌 と、いかにも常識に生きているようで、その実復帰世代の闇は深いとらんでいるんだけれど。

喜久 あのときは左側通行が右側通行に変わってまごまご、今は孫を待ち望んでまごまごこの世代です。わが家はみんな男不信だからね、まずあきらめた方がいいよ。さて、私の寝場所はどこ？奥でいい？いつものようにな。

喜久 喜久は萌を手伝い奥へ去る。時間の経過。里子はタオルでた えの額の汗などを拭く。

拭く。

里子 お月様が半分。何だか淋しげ。

たえ あれは片割れ月と言つてな。

里子 片割れ月――

たえ 逢ふことは片割れ月の雲隠れおぼるけにやは人の恋しき。祖国を思う沖繩の心。お前に見えるか、見えない半分か。暗い半分か祖国に忘れられた沖繩さ。

里子 (月を眺めているが) 見えない半分。沖繩。暗い方の月。

たえ 見ずにすむなら……それもいいさ。

里子 いいえ、それでは全部をみたことにならない。全部を見なくてはいけないんです！

たえ 里子。

里子 ごめんなさい。

たえ ははは……なんだかほんとの娘のような気がするさ。

たえ

安仁屋俊が心配してやって来る。

俊 おばあ。

たえ ああ。

俊 大丈夫か。

たえ まだあの世へは行けんらしい。

俊 当たり前さ。基地を追っ払うまでがんばってもらわんと。

萌と喜久がもどってくる。

萌 そういうムリをさせるのはやめてちょうだい。

喜久 俊。

俊 おばあが心配で。

萌 闘いが重要でも、健康管理をおろそかにしてはダメ。定期的にドクターに来てもらってるんだが、

俊 私、これから休みのたびに帰ってきて、チェックすることにしたから ね。

萌 ありがたい。そりゃ、ありがたいけど、

俊 けど、なに？

萌 ちよつと、怖い。ははは、冗談、冗談。

俊 栄子ねーねーの憧れのエースっていうだけだったら、笑って済ますけど、基地反対闘争のリーダーとして立場にある人だからいわ。おじいおばあを弾除けにするような闘いはしないでよね。

俊 弾除け。

萌 座り込み体制、あれ何よ。動員ではつきりするのはおじいおばあだけじゃない。

俊 若いメンバーも必ず配置してあるよ。本土からの支援もあるし。

萌 数は書いてあっても、予定ばかり。名前が埋まっていけないじゃない。

俊 職場の締め付けもあるから直前にならんと決まらんのだよ。

萌 本土の支援は、予定と実際の数がばらばら。

萌

俊 実際の数のほうが多いんだよ。運動は広がっている。おじいおばあを弾除けだなんて考えてもいないよ。

萌 日本軍の玉砕戦法とおんなじ戦法とらないでよね。  
たえ 命どう宝がわしらの基本だ。玉砕と、正反対だ。  
萌 だったら。

たえ 萌、わしらを見損なつたらあかんぞ。わしは十五の時から戦つてきてるんだ。15までのわしは、日本の軍隊の捨石じゃった。それからの60年は捨石を拒否する戦いだ。そのわしらの戦いに、俊たちが、加わってきえてくれた。よろこんどるんじや。

俊 おじいおばあのエネルギーはすごい。徹底した非暴力の戦術も、おじいおばあたちの経験から生み出されたものだ。それだけに、おじいおばあ健康重視という萌の指摘はしっかり受け止めようと思う。思うだけじゃダメよ。医師や看護師との連携。運動のリーダーは、もつとリアリズムでないと。

萌 リアリズム？

俊 ハハハ、しかし、今日のようにお前の、予感、靈感に救われることもある。リアルだけでは運動は続かん。

俊 ロマンだよ、闘いのエネルギーは。なあ、おばあ。

たえ 俊にロマンなあ。

萌 おばあリアリズム論争するとは思わなかったが。

たえ 女子師範の秀才だ、みくびるな。

喜久 俊、残りもんだが、ごはん食べてるか。腹が減っては戦にならない。これリアリズム。

萌 それはくそリアリズム。

喜久 飯食えばくそはでるさ。

萌 ああ、50代は品がないなあ。

俊 …でも、テントのみんなに悪いし——

萌 栄子ねーねも、もう帰ってくるだろ。

俊 こんなにいつも遅いんか。

萌 ご心配でしょう。はい、上がって。青年部長もたまには腰をおろして、酒をグイっと。母ちゃん、酒！

俊 (喜久、酒の支度を) ゆっくりお待ちください。

萌 まあ。

俊 まあまあ言っていないで——(と言いつつ手早く泡盛やコップを用意して)で、そのロマンのほう

萌 どうなってるの。

たえ これがからつきダメ、とみた。

萌 リアリズムもダメ。ロマンチズムもダメときたら、呑むほかないじゃん。はい、カンパニー。

俊 萌には、かなわん。

萌 ねえ、沖縄国際大学へ日本側が入れなかったのはなぜだと思う。

俊 今度はまた何の話かと思えば。

萌 俊にーに、おじいおばあ相手で、テンポがのろくなってない。

俊 そりや安保条約の「地位協定」だろ。

萌 それが、どうもストロンチウム90という放射性物質を含んだ安全装置が見つからないらしいの。

俊 ストロンチウム90——

萌 今、医療関係者も調査し始めたけどね。今度こそ米軍基地を撤去させないと。

俊 萌 俊 だからこそ、ムチャな運動は避けなきゃ。息の長い闘争になるんだから。頼んだよ、青年リーダー。

萌 わかった。

俊 俊より萌のほうがリーダーにむいてるかなあ。

たえ まいったなあ。(一同の笑い)

喜久 おばあ、奥で休むさ。

たえ ああ。

俊 今日 ゆっくり休んで。…萌がいいと言うまでゆっくり休んで。

萌 そういうこと。

俊 たえは、喜久に支えられて奥へ。

萌 酒に酔った栄子を抱きかかえて真栄城秀人が来る。

萌 酒に酔った栄子を抱きかかえて真栄城秀人が来る。

栄子 もう大丈夫。サンキュー。  
秀人 あんまり呑みすぎるな。  
栄子 今夜だけ。今夜は特別、寂しい月が出てるからさ。  
秀人 月。  
栄子 秀人がいてくれたから、安心して飲めたんだ。堀内孝雄、サンキュー  
喜久 栄子？  
栄子 はい、脳天気の栄子です。  
秀人 失礼します。

栄子は縁側へ倒れこむ。

喜久 秀人。栄子！  
萌 栄子ねーねー！  
栄子 水――

この間に、俊が外へ出る。

俊 お前が飲ませたのか。  
秀人 金武のスナックへ入ったら栄子が働いていて、どうもやばいようだから送ってきただけさ。  
俊 なぜ止めなかった。  
秀人 あいつは仕事だし、俺も職員仲間と一緒にだったんだ。  
俊 もうこのあたりをウロウロするな。  
秀人 わかっている。：：俊。  
俊 うん？  
秀人 栄子はな：：酔っ払ってお前の名前を呼んでいた。  
俊 でまかせ言うな。  
秀人 お前はエース、俺は女房役のキャッチャー、勝負は見えていた。早いとこ何とかしろ。  
俊 秀人――  
俊 後くされは海人の恥だ。明日からまた敵同士、覚悟しておけ。(走り去る)  
俊 畜生！

と、地面を蹴飛ばすが、石に当たって痛さにしゃがみ込む。

萌が出てくる。

萌 俊にーにー、栄子ねーねーの介抱頼むわ。  
俊 痛アーツ。  
萌 泣いてるの。  
俊 違う。悩んでるだけだ。  
萌 へえ。30男も悩むんだ。  
俊 悪いか。  
萌 いい、いい。悩んでる俊にーにーは魅力的だ。  
俊 年上をからかうんじゃない。

俊は足を引きずりつつ中へ入る。

栄子 俊、俊。外の空気吸わせて。  
喜久 栄子！  
萌 放つときやいいのよ、この甘えん坊。

俊は栄子を庭の片隅へ連れて行く。

栄子 怒った？  
俊 別。  
栄子 怒ってる。

俊 怒っちゃいない！

栄子 ほら。

俊 もつと、もつと人生真面目に考える。

栄子 ……

俊 ゆるんだ自分を見直して、再出発するんじゃないやなかったのか。

栄子 そうよ、今でもその気持ちに変わりはない。

俊 だったら――

栄子 まず仕事見つけて、食べてかなきゃならないの。飲み屋しかなかったのよ。

俊 畜生！（大地を再び蹴ろうとして思いとどまる。）

栄子 俊家のように、お父が海で働いてやりくりしていける家とは違うの。

俊 俺だって漁に出たいさ。イラブチャー、マグブ、アカジン、エビ、サザエ…この手で網を引っ張

る手応えを感じたいさ。

栄子 ワジワジー（怒る）

俊 ワジワジーさ。

栄子 防衛施設局に雇われて、船を出してる海人もいる。

俊 ああ、日当が八万円もらえるそうさ。補償金の手を打てば、定期的に金が入るから基地容認する

海人も何人かはいる…だが基地を許したら、漁場も金も全部消える！

栄子 変わってないね。

俊 基地をなくさなきゃ、俺は変われん！

栄子 ……私は…変わった、汚れちまった。

俊 たいていの汚れは海に入れば消える。

栄子 連れ出して。

俊 ……

栄子 どこかへ連れ出して。海へは何度も潜ったさ。汚れは消えたっていうんなら抱いて！

俊 ……辺野古の基地計画をつぶしたら…迎えに来る。

栄子 俊！

俊 呑みすぎるな。（走り去る）

栄子 ……呑みすぎるな、呑みすぎるな。おんなじことしか言えねえのか。うちのバッテリーは。

きやあという悲鳴。

時間の経過。

夜の蟬の声しばし――悦子と秀人が辺りをうかがいながら

戻ってくる。

秀人 俊には二度とここへくるなって言われたんですよ。このあたり、宮城さんちの周辺。

悦子 ごめんね。明日も朝早いだろうに。

秀人 栄子には黙っててください。

悦子 ありがとう。誰にもほかに頼めなかったから。

秀人 テントに座ってる連中に頼めば、力になってくれると思うけど。

悦子 母さんは、知らせるな、警察には知らせるなっていうの。

秀人 おれなら、警察に知らせないだろう。米軍の手先のような男だから、アメリカ兵の犯罪は握りつぶす

悦子 に違いないとかがえたわけだ。

秀人 ごめんなさい。米軍の手先とは思ってないけど。

悦子 おれ、アメリカ兵の犯罪を、絶対許しませんよ。見つけて突き出してやるつもりで来たんですよ。銃

秀人 突きつけられても、ひかない覚悟で来たんですよ。

悦子 頼りになるって思ったから。一人では怖くってとても。

秀人 電話、嬉しかったです。頼りにされたんだって。あの、うやむやにするのは、おれ絶対反対ですから。

悦子 役に立たなくって、残念です。じゃ、これで。

秀人 お茶だけでも。

悦子 ここには来ない覚悟でしたから。栄子には、黙っててくださいよ。

家に入って、悦子、受話器を取る。

悦子 新垣さんのお宅ですか。（受話器を押さえて）あ、私、宮城です…遅くなりました。ご心配だったで

しよう。真衣、私のところを訪ねてくれましたから……ひとまずご連絡します……。はい、進路に悩んでいるようで、詳しいことはあらためて……ええ、ですから今夜のところは私の家で、ご安心ください。……はい、ではおやすみなさい。(切ってから、ためらった後、再び電話をかけようとする)

喜久がくる。

喜久  
悦子  
喜久  
悦子

どこへかける。  
やっぱり警察へ。  
やみれー。  
ぬーんち(なぜ)?放っておいたら、また――

受話器を奪い合う。

喜久  
悦子  
喜久  
悦子  
喜久  
悦子  
喜久

基地がある限りなくならん。  
だったら、泣き寝入りということ?  
それが、沖縄だ。  
そんなこと許さらん!(再び電話しようとする)  
止めろって、  
おばあ起こして決めてもらう。:  
お前が教師として許せないのなら、明日、あの子が落ち着いてから……親御さんともよく話して事を進めるべきだ。お前の一存で、あの子の将来をめちゃくちゃにするかもしれないのだぞ。

萌が出てくる。

萌  
悦子  
萌  
悦子  
悦子  
悦子

ああ、さつき誰の夢見てたんだっけ、いい男のようでもあったし、ちゃらんぼらんのようにもあつたし。ああ、思い出せんなあ。じれったいなあ。

いい夢見てたのに起こされて。

悦子  
悦子  
悦子  
悦子  
悦子

ああ、相手の指に思いつきり噛み付いてやったんだそうだ。なぶられはしたが、やられずには済んだ。

悦子  
悦子  
悦子  
悦子  
悦子

アメリカよ。

悦子  
悦子  
悦子  
悦子  
悦子

明日、なんならうちの病院で。しっかり検診を受けたほうがいいと思うけど、まず大丈夫。むしろメンタルな面でのケアが大事ね。人間不信、男性不信になるケースも結構あるし。ああ、男性不信は珍しくもないけど、この家では。

悦子  
悦子  
悦子  
悦子  
悦子

……  
自堕落っていうか、性的にだらしなくなるケースもある。レイプやレイプ未遂が原因でね。先生もよく知ってるんだろ。

悦子  
悦子  
悦子  
悦子  
悦子

根っこを断ち切らないと駄目なんだよ。黙っていたら、いつまでたっても繰り返されるんだよ。

悦子  
悦子  
悦子  
悦子  
悦子

思い出した。

悦子  
悦子  
悦子  
悦子  
悦子

なに。  
あの軟弱男だ。さつきおばあを運んできてくれた男。

悦子  
悦子  
悦子  
悦子  
悦子

その男がどうしたの。  
夢の中で迫ってきたんだよ。ああ、忘れたい、あんな男はだめだ。起こしてもらってよかった。難しいよね。いろんな根っこが複雑に絡み合ってしまった60年だから、沖縄は。

悦子  
悦子  
悦子  
悦子  
悦子

栄子が来る。

悦子  
悦子  
悦子  
悦子  
悦子

栄子、ありがとね。  
落ち着いたみたい。一緒に風呂に入って。寝たわ。精神的ショックが大きかったと思う。

悦子  
悦子  
悦子  
悦子  
悦子

同じ見解。

悦子  
悦子  
悦子  
悦子  
悦子

こんな時間に、何でまたキャンプ近くに。  
悦子先生に相談したかったんでしょ、東京行きを。  
あんたが話してくれて、あきらめたとおもったのに。

なるほど。毒をもって毒を制しようとしたわけか。  
薬なら萌に調合を頼むはずだけどね。

栄子  
悦子

そういうことじゃないわよ。

私ね、東京で、一つだけ実感したことがあるんだ。東京ではね、ほんの一握りのタレントを持つ人以外は、みんな、その他大勢になってしまっていて。私たち二人、その他大勢に耐えられなくて、二人だけの世界に狭く狭く閉じこもるほかなくなったの。それがまた苦しくなって、こうしてひとり戻ってきたわけでもあるんだけど。

萌

栄子ねーねーは、地元高校のアイドルだったもんね。

栄子

それが、ギャップを増幅させたかもしれないけど、

悦子

それだけじゃない。

栄子

真衣には、そんな話をしたんだけど。

喜久

お茶入れてくるよ。

萌

どうする。俊にーにーが知ったら、黙っちゃいけないよね。

悦子

警察に電話しようとして母さんに止められたわ。絶対だめだって。

萌

警察は握りつぶすわよ、根掘り葉掘り、ニヤニヤしながら聞いた後でね、証拠不十分だって。まして、高校生じゃない。深夜徘徊で学校通報、逆に厳罰を求めるが落ちよ。

悦子

そんなこと許さない。学校では私が守るわ。

栄子

俊なら、どうすると思う。

萌

米軍ヘリの墜落。米軍兵士の性犯罪。米軍は沖縄のよき隣人で決して有り得ないって、抗議集会を組

織しようとするだろうな。

栄子

真衣はどうなる。

萌

そこよね。マスコミは匿名扱いしても、必ずかぎつける。被害者が好奇心にさらされる。

悦子

黙ってれば、加害者は罰せられることもなく、これをいいことにますます増長する。許せないなあ。

喜久

(茶を配りながら)基地がある限りなくならん。

悦子

母ちゃん、さっきもそういった。

喜久

泣き寝入りか、とお前は言う。そんなこと許せない、と。

悦子

悔しいが、それが沖縄の現実だ、と母ちゃん。

喜久

沖縄のリアリズムだ、なあ萌。

たえ

(いつの間にか起きてきている)ハナコとおんなじだ。

喜久

おばあ。

たえ

朝鮮半島から無理やりつれて来られ日本人ではないのにハナコと呼ばれ、弄ばれ。日本はハナコに目

喜久

をつぶってきた。今度は日本の娘がアメリカに弄ばれても日本人は目をつぶって耐えなくちゃなら

たえ

ん。哀しいさ。悔しいさ。里子、あんた、この哀しみを写せるかのう。

まだ、蟬の音がする沖縄である。

里子一人を残し、溶暗。

里子

ショックでした。この30年の間に、アメリカ兵が刑法犯で検挙された件数が7千件という事です。わかっているだけで、この数ですからその裏に隠された性犯罪の数はどれだけあるでしょうか。その裏、見えない部分で流された血、涙。片割れ月の見えない半分。私はカメラを持つ自身を失いました。

(テントからの報告)

俊

11月16日 足場建設を巡って海の上の攻防が続きます。

たえ

今朝も5時には座り込みメンバーが集まりはじめる。7時にはその数50人。

健

作業船がホワイトビーチを出港したぞ！

ユキ

午前9時30分。辺野古沖合に作業船、迫る。

健

阻止船4隻、カヌー隊22隻、準備完了。

ヨシ

必勝祈願・安全祈願の「うがみ」をする。

平良

「天の神様、どうか基地を作らせんでください。命を張って闘う人たちにどうかその力の限りお恵み

健

をおあたえください」  
台風の影響下、波は4、5メートル。タグボートに引かれた巨大な作業台船が固定ブイを乗せて近づ

く。

俊 「これからあなたの船の前に入る」 大声で叫びながら、小さな阻止船で行く手を遮ろうとする。  
健 作業船は止まるうとしない。距離は、縮まる。10メートルが5メートル、5メートルが1メートル、50センチ。

ユキ 危ない！

健 「ガーン」ついに接触。

ユキ 一人死なないと分からないのか！

ヨシ にやにや見下ろす作業船の作業員たち。基地建设は人間性を破壊していくんど。

ユキ 二人のメンバーが作業台船の前に身一つで飛び込む。

俊 作業台船はその場に停泊。アンカーを下す。

健 私たちは今日、ボーリングやぐらの建設を止めました。作業資材を乗せて、作業船は沖合に停泊。明日はさらに緊迫した朝を迎えるでしょう。辺野古に集まってください。

たえ 私たちは生き抜いた。今日はそのことが何よりも勝利です。

里子 私はカメラを持って沖縄に行く自信を失いました。

7 11月 日曜日の午後 中根家

明るくなると中根家。アルバムをぼんやり見ている里子。救

急車の音

が聞こえると里子はハツとして窓外を注視する。や

がて、本を手にした弘美がそっと入ってくる。

里子 はいいきな

り弘美を抱きしめる。

弘美 お母さん、大丈夫——

里子 ……

弘美 (額をさわって) まだ熱がある。薬飲んだ？

里子 まだ。

弘美 飲まなきゃだめじゃないの。(用意をする)

里子 ふふ…

弘美 あ、久しぶりに笑った。何？

里子 弘美に「薬飲まなくちゃだめ」と言われるなんて。

弘美 ……たまにはね。

里子 図書館。

弘美 うん。

里子 何借りてきたの。

弘美 はい、水と薬。

里子 ありがとう。

弘美 (本を手にして) 「沖縄の基地」「沖縄歴史ガイド」とかね。

里子 ……

弘美 いつ沖縄へ連れて行ってくれるの。

里子 ……そうね。

弘美 お金なら、お年玉積み立てた分でかなりはいけるって思うんだ。

里子 そのうちね。

弘美 ……お母さん、変。

里子 何が。

弘美 突発性の熱が冷めた。一過性が通過した。

里子 ……ダメなのよ。

弘美 弘美を連れて行きたいって、あれほど言ってたじゃない。必ず連れて行くって。

里子 ……

弘美 ねえ、どうして行くこうって言ってくれないの。

里子 弘美。

弘美  
里子  
弘美  
里子  
弘美  
里子

なに——  
ダメなものダメなのよ。  
お母さん……  
……ごめん。  
……  
結局、父さんの言う通りね。

そこへ、少し酔っ払った浩一が帰ってくる。

浩一  
弘美  
浩一  
里子

弘美ちゃん、ワウーワウーワウー　　ウーウーウー  
いつまで続けるの。  
里子さん。ワウーワウーワウー。どうだ。

ええ。(アルバムを開く)

お帰りなさい。

これ、寿司。

いいことあったんだ。

ピンポン。父さんの燃料電池ロボット。わかるか、水素と空気中の酸素を反応させた電池で動くロボットの開発論文が学会で特別表彰されると。

すごい。

ああ、すごいことさ、そこで前祝い——

(写真を見て涙ぐむ)

どうした。(写真に気付く)。いい加減にしるよ。お前は夫の快挙も喜べないのか。俺だって、辛いとこ頑張ってるんだ。ばかにするなよ！

(外へ) 去る。

弘美  
お母さん。お父さん！(あとを追う)

あとを追う弘美を残して溶暗。遠く波の音。三線の調べが、切れぎれに聞こえてくる中

弘美

お母さんの心の変化は私にもわかりません……。黙々とこれまで撮った写真の整理をしていました。父さんは相変わらず帰りが遅くて、ロボットの開発で忙しい毎日でしたが……。一月終りに突然家のロボット犬を会社へ持ち帰り、それ以降ぱたっとロボットの話をしなくなりました……。私は、今年の四月から一年遅れで学校へ復帰しようと考えていたのですが……。気持ちが揺れ動きます。何かきっかけが欲しい……。きっかけは自分で見つけるより他ありません。そんな二月、母さんは、手紙を置いて沖繩へ行きました。「今日で区切りをつけますから、わがままを許してください」と書いてありました。末尾には、トウーナマヤサ ナマサント イチスガ——父さんは手紙を読み、黙ったままでした。私は……ある決断をしました。

8 二月の朝 宮城家

明るくなると、ライフジャケットの里子。

健  
里子

かつこいいですよ、なかなか。そうお？

何か運動しました。基地反対運動なんてのじゃなくて。それが何にも。

ありや。でも、ま、あとは実践と行きましよう。

でも、何だか、乗り出すとなると、海は怖いわ。

このきれいな海に基地を持つてくるな！という怒りを込めれば波なんか乗り切れます、きっと。

(あらためて健を見つめて) 変わったわね——

そう。

強くなった。

健  
里子

ふふ……俺なんか失うもの、何もないですからね。

里子 ずっと沖縄に。

健 ええ、去年の12月から土産物店でバイトしながら。もうすぐ船舶操縦士の免許をとって、まあいけるところまでやるつもり。こういう燃えるもの、探してたんだ。

里子 いいな。

健 中根さんには、写真があるじゃないですか。

里子 いいのはその若さ。

健 そりゃ、仕方ないでしょう。

二人の笑いの場へ、ハナコが来る。

ハナコ 楽しそう。

健 おばあも気分よさそうじゃない。

ハナコ 今朝はあつたかいからな、それだけで幸せ、さ。(地面に横になり) もうすぐ桜が咲く。

里子 ヒカンザクラはもう満開ですもの。

ハナコ 今度こそ、桜の花びらに埋もれてむこうへ行けるさ。

健 向こうって？

ハナコ 願わくは花の下にて春死なんその如月の望月のころ。

里子 ハナコさん。

健 お経。

里子 西行。西行法師。古文で習わなかった？

ハナコ 教えてくれた兵隊さん、桜の季節は生き延びて、梅雨の中、泥にまみれて死んでいったよ。

ヨシおばあと知念ユキが来る。

ヨシ おおい、たえ、迎えに来たぞ。

健 おばあ、お迎えが来たよ。

ハナコ ありがたや。お迎えがきたか。(と去る)

萌に支えられながら、たえが出てくる。

ヨシ 「お」をつけるなよ。わしらには響きが悪い。

たえ おはよう。

ヨシ おはよう。

ユキ 大丈夫、か。

萌 大丈夫じゃないの、ねえおばあ、今日は座り込みやめときましょ。

ヨシ ああ、今日は休め。

たえ 行かんと、畳の上で死んじまう。

健 すごいな、普通は畳の上で死にたいと言うんだろ。

ユキ 甘いこと言うのはヤマトンチュウだけさ。

萌 仕方ない、薬とコート用意するから待ってて。(と言って奥へ消える)

ユキは中へ入り、写真を見つめる。

ユキ この写真撮ったの、あんただな。

里子 はい。

ユキ このフェンスの写真、柱が外へ向かってるのは何故だと思う。

里子 いえ、：：ああ、内へでなくて外へ——

ユキ 柱が曲がってる方が閉じ込められた側さ。

里子 基地の内側へでなく、——

ユキ アウシユビツツのフェンスはうちに向かっていた。このフェンスはわたしらを囲うためのものさ。沖

縄の中に基地があるのでなく、基地の中に沖縄があるのさ。

たえ 外からの進入を防止するフェンスと内側からの脱出を防止するフェンスでは役割が違う。それだけの

ことだ。

ヨシ ユキの話は真実をいいえてもいるがな。それよりお前、もうちょっと優しくものが言えんか。

ユキ 無理だな。たまにここへ来てささやかな良心を満足させて、帰れば冷暖房の部屋で沖縄のことは忘れ  
るヤマトンチュウに。

：。

ユキ 沖縄に来ることより、自分をさらけ出す地元で運動しろ！

健 そりゃないじゃん。

ユキ だったら、沖縄の基地のひとつは自分の町へ誘致する運動を本土へ戻ってやるんだな。

ユキ たえ、やめろ。この人たちは、むしろと気持ちに通じとる。

ユキ きれいごとはうんざりだ。たえおばあ。おばあは、ひめゆりの語り部を辞めた。やめりやいいんだ。

ユキ 聞く耳持たないヤマトンチュウに、どうか聞いてくださいと頭下げて聞いてもらおう話じゃない。記念  
館で涙流して、自動車道一本渡るともう土産物屋に一直線。米軍払い下げの店にわっと押し寄せる。

ユキ それがヤマトンチュウだ。ウチナンチュウの姿勢が問題なんだ。

（宣言するかの如く）

ユキ 気が狂って／いるやもしれず

ユキ 怒りと悲しみで／水が溢れ

ユキ いつか／こぼれ出すのか

ユキ その瞬間／何か／起きるのか

ユキ 狂気を抱き／日々を／送る

ユキ 沖縄びとよ／土人に帰れ

ユキ 野蛮人たる／自己を直視せよ

ユキ 怒りで舞え

ユキ 怒りで舞え

ユキ 怒りで舞え

萌がくる

萌 沖縄びとよ 土人に帰れ 野蛮人たる 自己を直視せよ 怒りで舞え私も好きだな、ユキおばちゃん。

萌 沖縄国際反戦集会のアピール文の一節。

萌 平良おじいさんが弘美を同行してくる。

弘美 お母さん！

里子 弘美！

弘美 お母さん

里子 どうしたの。

弘美 来ちゃった。一人で来ちゃった：：！（抱き合う里子と弘美）

平良 よかった、途中で道を尋ねられてな。里子さんの娘さんとわかった。

里子 ありがとうございます。

ユキ 行くよ！

平良 待ちなさい。喰い逃げもよくないが、自分の言いたいことだけ言って逃げるのもよくないさ。

ユキ 何で私が逃げる。

平良 すまん。逃げるはユキの一番嫌いな言葉だったな。

ユキ 言い返したかったら何でも言え。

平良 守札の民とも思えぬ物言い。

ユキ アーメンに何が分かる。

ヨシ そこまでにしとけ。仲間割れして誰が喜ぶ。

平良 あの橋の上で、（弘美をみて）その娘が描いた辺野古の海は赤く燃えていた：：火を消すのに誰彼を

問う時ではない。

ユキ 説教はごめんさ。私は、先に行くよ。

ヨシ わしも行く。たえさんは、その娘さんの教育担当ということにしたらどうだ、今日一日は。

ユキとヨシが去る。

平良 はは：：やっぱりなまくら信者のお説教だったか。また心を鍛えにテントへ行ってきました。

平良、去る。

萌 (立ち上がろうとするたえを制して) おばあ、今日はかわりに私が行  
人数は差し引きゼロだ。

くから座り込みの

里子 私も行きます。

萌 ほんとに抗議船に乗るの。

里子 : トウナマヤサ、ナマサントイチスガ。弘美は、おばあここにいて。

あとで詳しく話す

から。おばあ、よろしく。

弘美 わかった。

健 里子さん、はやく。

里子 はい。

萌 健！私も行くって言ってるでしょ。

里子と健、そして萌は海へ向かう。

たえ メンソーレ。

弘美 めんそーれ。

たえ ああ、ぬくい手だ。

弘美 :

たえ ふふ……指がないで驚いたか。

弘美 : : 事故——

戦争で、もぎとられた……わしら、ちょうどあなたの年頃にな。負傷した兵隊の手当てをしていたら  
爆弾で吹き飛ばされた……

弘美 アメリカ軍に。  
たえ それが……南へ逃げる日本兵にさ。足手まといはみな殺しさ……

秀人が急ぎ足で来る。

秀人 おばあ。

たえ どうした、めずらしい。栄子は昼前まで寝ているぞ。

秀人 おばあ、今日も誰か海へ漕ぎ出すつもりか。

たえ 客人が一人。この子の母親が。それがどうした。

秀人 危ないんだ。

たえ ほう、波が荒いか。客人は、今日実地訓練といったところだろうから、大丈夫だろう。  
秀人 それが大丈夫じゃないんだ。おれの口から出たといっただろうと困るんだが。

栄子 (出てきて) なんね、秀人。

秀人 ああ。

たえ なんて格好ね。

栄子 トイレに起きたの。秀人の声があったから。なんね。

秀人 船、止めろって伝えてもらえんかな。作業船が、今日は抗議船にぶつkerって指令を受けてるんだ。  
海へ放り出して、それから助けてやれ。一度怖さを味合わせ、それから恩を売ってやれって。

栄子 確かな情報よね。

秀人 丸秘情報だ。

栄子 確かよね。

秀人 嘘言っただうする。

栄子 抗議船を全部撤退させておいて、そのスキに作業を遂行するためのガセネタってこともある。  
秀人 おれ、栄子に嘘言ったことがあるか。信じてくれ。信じて欲しい。(去る)

たえ トウナマヤサ、ナマサントイチスガ。

栄子 ほら今だ、今やらなくていつやるんだ、何？

たえ 里子がさっき口にした。

栄子 (弘美に) あんた、すぐ浜へ走って。

弘美 私、

栄子 あんた、あれ、弘美。里子の娘。

弘美  
栄子

はい。  
写真を何度も見せられたから、分かった。あんたじゃ、浜も分からないね、私が行く、すぐ用意するから待っていて。(と奥へ)

トオナマヤサナマサントイチスガ、母の置手紙にもありました。ほら今だ、今やらないでいつやるんだ。：母は何をしようとしているんですか？

正しいことさ。

でも危険なことでしょう。

この島では正しいことはいつも、危険と隣り合わせさ。

アメリカですか。

いいや、船は日本の船だ。

60年前と同じなんですな。

(出てきて) 急ぐよ。

栄子。たのんだぞ。

弘美  
たえ  
栄子  
たえ

人々の抗議の声が湧き起こる。里子の声が聞こえる。

里子

調査船、作業船の皆さん、この美しい海を壊すのは止めてください。海底に何十箇所もの穴を開けるボーリング調査は、環境アセス法の手順を踏まなければ、法律違反です。国が作った法律を国が破つてどうするのですか。防衛施設局の皆さん。あの久志岳と辺野古岳をみてください。実弾演習で、山肌はぼこぼこです。今度はサンゴの海底をぼここにするつもりですか。みどりの丘は取り上げられて米軍の基地です。今度は海を取り上げて米軍の基地にするつもりですか。この基地を作るのに一兆円かかるそうです。みなさんが汗水流して働いて納めた税金が使われるのです。アメリカ軍のために、なぜこの美しい海と巨額な税金をプレゼントしなければならぬのですか。普天間の子ども命も、辺野古の子ども命も同じです。普天間で危ないことは辺野古でも危ないのです。六十年前と同じさ。

たえ

あたりが騒然となる。弘美の「お母さん！」という叫びが響き。  
時間が経過。  
夜。

き。

健

萌

健

萌

健

萌

健

萌

健

萌

健

萌

健

僕はなめていたんです。敵をなめていた。この闘いをなめていたのかもしれない。それが、里子さんを危険に落とし入れ。すみません。止めるべきでした。

怒りを込めれば荒海なんぞ、苦もなく乗り切れる、という精神主義はただけいけないけどね。出来レースやってるわけじゃないんだから、展開が読みきれないことなんぞ、いくらでもあるわよ。

いっばしのリーダー気取りもありました。足手まといのひよつ子が仲間に入れてもらえただけでありがたいのに、分もわきまえず。すみません。

そんなことないって。うちのおばあもまれにみるいい青年だってほめてるんだから。初めてここを訪れたときのあんたを思い出すと別人のように成長したって。

買い被りです。

俊にーも買ってるし。

僕なんかほんとに役立たずのごくつぶしです。

こら、いい加減にしろ。

はい。

だれもあんたにそれほど期待をかけてるもんか。

はい。

陽気な極楽トンボが一匹飛び込んできたぐらいにしか思っただけ。

トンボ。

秋にやって来て、よく冬を越したって、感心してるだけ。

そうなんですか。そうですね。そんなもんですよ。

簡単に納得しないでよ。おい、名古屋のてんむす。

：

違った。

手羽先です。風来坊です。



俊 健 ん限りの船を結集していたから、作業船は里子さんを引き渡すと帰っていった。怖かった。ほんとにな。しかしおばあ、里子さんの言葉と行動に仲間の意気は高まつてるよ。

悦子が帰ってくる。

悦子 里子が、敵船に体当たりしたんだって。

健 そんな。

悦子 ユキが触れ回ってる。あの女カメラマンは只者じゃない、狂うことができる本物の女だって。

健 そんな。

悦子 おばあ、今度の里子、いつもとちよつと違ってない。いるのよ、生徒にも。陽気なんだけど、どこか体になじまない陽気さというか。一人になると、グリーンと沈んでいるような陽気さ。健とは違うんだな。

健 先生、僕が分かってない。

悦子 ごめん。でも、私は健が時々顔出してくれて、救われてるのよ。

健 名古屋のういろー

悦子 違います。

健 あれ、そお。「オース」って来るから、外郎君だとばかり思っていた。弘美 手羽先さんですよ。

悦子 そんなところに「さん」をつけない。

悦子 悦子先生ですか。私、里子の娘の弘美です。母の様子がいつもと違うって、どういうことですか。

悦子 あなたが、弘美。お母さんから話は聞いている。うん、もう、相談に乗る必要もない顔してる。これは、

悦子 娘より母親だな、問題は。ゆっくりしていつて。

悦子 来る早々大事件にぶつかって、ゆっくりとはいきそうにないな。中根家はどうも波乱を呼ぶ一族かも知れないぞ。

悦子 では、弘美、神風女の元へ連れてって。

悦子 はい。

悦子 弘美

ヨシおばあが来る。

ヨシ 里子はどうだ。

悦子 はははは、一躍、有名人になったな、里子は。写真じゃなくて、武勇伝で。

悦子 飲まんか？里子の言葉に血が騒いでな。眠れないから一杯やろうと。

悦子 うん。俊も健も付き合え。

悦子 もう行きます、テントへ。

悦子 お前達の目当ては、3人の孫娘だものね。

悦子 違いますよ、僕は里子さんを。

悦子 こりやまた、ずいぶんと年増好みときたものさ。違いますって。

悦子 事務所へもどって、情勢の分析やりなおります。おばあ、飲みすぎるな。

悦子 心配するな。栄子なんぞとは、鍛え方が違う。

悦子 それでも俊、いくらかりーダーらしくなってきたじゃないか。

悦子 まいったなあ。

悦子 おやすみなさい。(俊、健、去る。)

悦子 こんなもんでいいか。

悦子 上等よ。

悦子 弘美、こつちへ来るさ。

悦子 はい。

悦子 里子の一人娘。

悦子 中根弘美です。母がご心配をおかけしました。

悦子 なあんの。

悦子 聞いてくれる人がいて、初めて話す甲斐も出てくるというもんだ。今宵は、弘美に聞いてもらおうとするか。

悦子 はい、聞かせてください。

悦子 弘美

栄子の声。

栄子 俊、俊って、秀人はどうなの。秀人の思いはいかがなの。  
秀人 俊と話したか。

栄子 忙しいもの、俊は。

秀人 ……座り込み始めてから8年。よく続く。

栄子 敵ながら天晴れ？

秀人 (栄子を見つめる)

栄子 うん？

秀人 そういう…茶化すような言い方止める。

栄子 性格。

秀人 野球部の、

栄子 マネージャーだった頃の栄子は、変わりましたって、何度言えば分かるの。(タバコを取り出す)

秀人 止めるよ。アメリカのタバコなんか。意地でも吸うな。

栄子 同盟国じゃなかったの。

秀人 ……辺野古の海もアメリカと観光客のゴミだらけ。タバコの吸殻。…おれは、海人だ。…栄子、

栄子 おれ、3月で、仕事変わるかもしれん。

秀人 首？今日のこと、ばれたの。

栄子 そうじゃない、違う。俺も、好きで今の仕事を続けてるんじゃない。

秀人 止めてどうするの。男の仕事口、なかなかないよ。嫁さんもうにも食っていけなくては。

栄子 帰る。飲みすぎるなよ。

秀人 何とかの一つ覚え。好きだっていったらいいのに。「栄子、おれはお前が好きだ。」あほらし。

栄子、家に戻る。

ヨシ 弘美はいくつになる。

弘美 17歳になります。

たえ ちようどあの頃のわしらの歳だ。わしの仲間は8割がた死んだ、17歳で。軍隊はわしらを守ってくれたか。守っちゃくれなかった。そればかりか、わしらを巻き添えにした。基地は島を守ってくれるか。守っちゃくれん。戦争に巻き込まただけだ。わしは、栄子たちを同じ目に合わせないためにも、基地を許せないんだ。

明かり溶暗。

## 9 前場の数日後

下手台上。カンカラ三線を弾いている健を見つめている弘美 と、真衣、やがて弾き終わるので拍手。

健 拍手もらえるほどうまくないさ。

弘美 でも得意なギターを手放して、習ったんでしょ。

健 少しでも沖繩に馴染もうと思って——

真衣 すごい。

健 なんてのは嘘。はじめギター弾いて歌ってたけど、浮いちゃってさ、やっぱりここには三線が合ってるって気がして。

弘美 ずっとここにいるの。

健 俺、今まで学校も仕事も一月ともったことがないんだ。しばらく踏ん張ってみようかな、と。

弘美 私、明日帰るの。

健 聞いたよ。うん。お別れにおじいやおばあちがカチャーシーを踊るってさ。俺の三線で、ということになってるけど、それは無理だ。

弘美 わあ、楽しみ、お願い、弾いて…(少し泣く)

健 楽しいってのに、泣くやつあるか。

弘美 だって…波の音聞いてるだけで、涙が出てくるもの。

健 そう言ってる間は、まだ観光客だな。  
弘美 そう?…そうね。

健 でも——あつ、弘美の母さんの癖うつっちゃった。  
弘美 でも、何。  
健 外から見ないとわからないこともある。  
真衣 それはいえてる。私ね、高校卒業なの。卒業したら東京へ行くの、家中の反対を押し切ってね。タレント志望だけど、つかみ所のない仕事でしょタレントって。失敗の確率が高いに違いないけどそりゃわかっているけど、やってみなくちゃね。親をあきらめさせちゃった。

弘美 ふーん。私は1年遅れの高二をやり直す。  
健 何年かして、またここで俺たち、会ったりしてね。  
弘美 海が残っているといいね。  
真衣 そう。  
健 任しとけて。おれがいる限りは大丈夫。

悦子と萌がくる。

悦子 何が大丈夫だって。

真衣 先生。辺野古の海は、健にーにが守ってみせるって。

悦子 頼もしい。俊の後釜が決まったな。

健 それは、まだ無理です。

萌 当然。十年早いわ。

健 十年ですか。十年ていうと、萌さんは36歳になるわけで、

萌 それ、なんの計算よ。

健 いえ、何も。

萌 なんの計算よ、この、なんてったつけ。

弘美 手羽先です。

萌 手羽先、しゃぶりつくすぞ。(家に逃げる健を追いかけ走る)

真衣 先生。私の卒業文集の文章、

悦子 そうそう、それ、話しておきたかったんだ。無理しないで書き換えたほうがいいんじゃない。

真衣 あのまま載せてください。

悦子 ご両親は。

真衣 話していません。

悦子 だったら、やっぱり。

真衣 いいんです。ただ、イニシャルにしてほしいんです。むろん、イニシャルにしても、すぐ分かってしまうことは承知しています。ただ、嫌な攻撃をされるようなときは、知らないって言い通せますから。

悦子 いいの。

真衣 卒業式には出ません。ちようど、オーディションとぶつかってるの。いずれにしても7年は帰らない

悦子 つもりです。7年たてば、人の噂も。

悦子 7年ってのは。

真衣 栄子ねーねが沖繩を離れていた時間です。

悦子 それは、たまたまの数字でしょ。

真衣 何の意味もありません。それでいいんじゃないかって。ありがとうございました。私、島好きです

悦子 。

真衣 そう。

悦子 島を捨てるんじゃないですよ。忘れたいからじゃないですよ。外から見ても、いいかなっ

真衣 て。健にーの受け売りです。でも、ほんとうに。

悦子 弘美と一緒に、今日我が家で送別会にしたら。

弘美 それは、無理です。私なりのお別れをします。さようなら。

真衣 さようなら。

弘美

真衣去る。

悦子 何か、二人で話したの。

弘美 ううん。あの人、悦子先生訪ねてきて、ちようどこで一緒になって。健さんの下手な三線を聞いて、それだけ。

悦子 そう。黒糖、舐める。

弘美 はい。

悦子 疲れているときにいいんだ。

弘美 先生も疲れているんだ。

悦子 ひどく、ね。

弘美 みんな何かを背負っているんですね。

悦子 うん。

弘美 真衣さんも何かを抱えてる。

悦子 わかるの。

弘美 うん。何かを抱えている。自分にははっきり分かっているけど、解決できない何か。目がふらついて

悦子 ないもん。

弘美 たえおばあも、ヨシおばあも。

悦子 聞いたんだ。おばあたちの話。

健 おおい、弘美。手伝って。

弘美 何を。

健 送別会の準備。

弘美 誰の送別会。

健 弘美たちのさ。

弘美 私ゲストじゃないの。

健 贅沢いなよ。すぐ来いって。

弘美 はい、手羽先さん。弘美、行きます。

悦子

栄子が戻ってくる。

悦子 あの変わり身の速さが、すっかり失せてしまった自分をしみじみと感じさせる。ふと漏らすため息。真衣ね。東京へ行くことに決めたよ。

悦子 あれれ。栄子ねーねの失敗談も役に立たなかったか。

悦子 役に立ったと思うよ。ずいぶん、きりつとした目をしてたって、今弘美に教えられた。確かに浮いた

悦子 目じゃなかったよ。

悦子 私は半年たつのに、まだ目は緩んだままだ。ちようだい、黒糖。

悦子 どうぞ。年取ると、傷の治り方も遅くなるのかね。心の傷の。(家へもどろうとして、俊が来るのを

悦子 見つけ) くれたびれた青年部長が来た。うかうかしていると、後釜狙う若いのがいくらもいるって、教え

悦子 てやってよ、強力なサポーター付きの。

悦子 (くしゃみをして) 悦子先生、今誰かと俺の噂してなかったか。

悦子 さあ。

悦子は家へ。

悦子 大変よ、俊。

悦子 何。

悦子 青年部長が危ないって。

悦子 誰かに狙われているってことか。

悦子 そう。

悦子 米軍。右翼。暴力団。

悦子 違う。青年部長の椅子よ。

悦子 それだったら、いつでも、どなたでも、そっこくおゆずりいたします。

俊は双眼鏡で海岸の方を注視する。それを栄子はグイと自分の方に向ける。

俊 おい。

悦子 たまには身近なところに眼を向けたらどう？

俊 ……気持ちには、いつも——  
栄子 気持ちだけじゃダメなの。

俊 ……前の旦那と——  
栄子 正式に離婚届け出しました。はい、黒糖。

俊 ……時々むなしさに襲われることがある、いつまで続くんだろうかと。去年の四月十九日から始まった海底ボーリング阻止の座り込み、九月九日から続いている海上での阻止行動が、とうとう年を越えて三百日目に入った。今は夜も昼も単管やぐらにしがみついて基地建設を食い止めている。だが……みんなに疲れもきているし……

栄子 だから？  
俊 だから……いや、だからと言うわけじゃないが……なんだかこんな話、真昼間に。雰囲気……その……口の中甘いでしょ。  
栄子 すまん。

俊 (そつと俊の方に寄り添い) そういう俊も好きだけど……ああ、我ながら矛盾している！エースは打たれても打たれても向かっていったでしょ。秀人がぼやいてた。施設局としては三月までに六十三ヶ所のボーリングを全て完了する予定だったのに、まだ一ヶ所もできない。住民の八割が基地建設反対になった。俊は立派だって。

俊 早く基地計画を撤回させよ。私も……  
栄子 ——  
俊 秀人は三月で施設局やめるつもりだと。  
な。

萌の声がする。

萌 いつまでいちゃいちゃしとるの。お天道様に恥ずかしくないか。  
栄子 恥ずかしくないさ。  
萌 おー、言ってくれるねー、うちの出戻り女。

時間が経過

奥の部屋でにぎやかな送別会の模様。抜け出てきた里子。  
喜久が来る。

喜久 戻る踏ん切りはついたの。  
里子 ……  
喜久 いつまでいてもいいんよ。  
里子 ありがと。弘美がね。  
喜久 弘美は大丈夫さ。ここへ来ると決めたとき、あの子は一つ飛んださ。飛ぶ楽しみを知った子は、もう、引きこもらないさ。  
里子 平良おじいに案内されて、ここへ初めて顔出したときの弘美の、あの紅潮した顔。見たことのない顔だった。  
喜久 そしてすぐに母親の武勇伝に出会うんだもの、ぶったまげて、ごちやごちやもやもやなんか、ふっとんじまったさ。  
里子 そうよね。

間

喜久 わたしね、里子がうらやましい。  
里子 私が？何で。  
喜久 家を飛び出してきた里子が。  
里子 私は、健ちゃんよりもっと手羽先の風来坊よ。根無し草みたい。喜久さんには根っこがある。  
喜久 岩に根を張るガジュマルのように。  
里子 そう。栄子が言ってた。沖縄でガジュマルは神木だって。  
喜久 キジムナーが住みつく神木か。根っこが強すぎて身動きできない……私ね、亭主に逃げられたのよね。聞いて、里子には話せるような気がする。逃げられたのよ……私が、アメリカカーに、乱暴されて……

里子  
喜久

正直に話したの。そのことを話した次の日の朝、男は出て行ってそれっきり。あの夜、悦子さんが警察に電話しようとしたのを止めたのも。72年に沖縄が日本に戻ったとき、たかだかと日の丸を揚げた。パスポートなしで、ドルを円に両替せんでも、東京へも大阪へも行ける。憲法で守られる。沖縄は、変わるって、信じてた。信じようとしてたのかもしれないね。72年が来て、1年2年3年。いっぺんに変わらなくなって、少しずつでも変わるって。それが、何にも変わらんかった。アメリカも、ウチナンチューも。耐えるしかないって、思ったの、あの時。みんなそれぞれ何かを耐えて生きてるんだ、この島ではって思ったの、その時。でもね、今ね、

ユキが来る。

ユキ

主役がどうした、今宵の主賓が。

里子

ごめん、ちょっと。

ユキ

しかしなんだ、こうしてみると、五十代の女が三人そろったわけさ。亭主を殺された女と、亭主に逃げられた女と、亭主を捨ててきた女と。私ら元妻トリオってわけだ。おじいおばあと復帰っ子はにぎやかに、私らはちよつと、しんみりいこうか。

里子

殺されたの？

ユキ

説明してよ。

喜久

米軍のトラックにひき殺されたんだ、ユキの亭主は、もうすぐ三十年になるかね。

ユキ

二十七年。

喜久

旦那はね、仕事帰りにちよつと飲んで、気持ちよく家へ帰る途中だった。後ろから来た米軍のトラックに跳ね飛ばされて、ユキが病院へ駆けつけたときはもう意識がなく、次の日に死んださ。右側を歩いていた。トラックはその旦那を後ろから轢いた。だが無罪。

里子

そんな。

ユキ

車が左を走るといふ、日本独特の通行規則が変わって日も浅く、かつ急を要する軍務中であつた。再三の警笛に気づかなかつたのは、飲酒歩行の被害者にも相応の責任がある。

喜久

加害者は咎められず、被害者への賠償はなし。

ユキ

殺され損よ。県警も大和の本部長はけんもほろろの扱い。

喜久

一九七八年の話。アメリカカーが占領してから、ずっと車は右側を走っていたの、沖縄では。

ユキ

ウウン。私も、テントに座ることにする。

喜久

家において、みんなを支えるだけの任務じゃつまらん。

ユキ

何と、何と。

喜久

イギリスの、ドイツの、プエルトリコの、ジャーナリストが来た、海洋学者が来た。大阪の大学生、青森の先生たちが来た。テントは、わしらの大学だって。おばあは生きとる。私、もう、支えるだけの毎日はいやだ。

里子

なんと、なんと、なんと。今宵は我ら五十代の総決起集会じゃないか。喜久は第一線で戦う闘士となり、里子は辺野古を伝える21世紀の戦場のカメラマンになる。乾杯！

ユキ

大きな再びの拍手の中に弘美の声が聞こえる。

弘美

弘美です。学校へも行かず部屋に閉じこもっていたら、24時間てほんとに長いとです、時間は停滞しとつとです。辺野古ではあつという間に、時間が、走るとです。

ユキ

弘美です。おばあたちの人生に驚いたとです。宮城家の三人姉妹にも驚かされるつとです。母も複雑です。みんな女です。私も女だと気がついたとです。

弘美

弘美です。四月から、二度目の高校二年生をやります。二度目の職場、二度目の旦那、世の中、二度目は珍しくなかとです。死だけは二度目がなかとです。命は一つつきりですから。だから命どう宝です。

拍手の中、溶暗。

里子の声　橋から名残の海を眺めました。：どこまでも続く水平線：その時、弘美が「ジュゴン」とつぶやきました。はるか彼方にジュゴンが海の上を跳んでいるような気がしました：幻のように浮かび、まばたきしている間に消えてしまいましたが：

旅客機の飛行音。里子に明かり。

里子　飛行機から見下ろした海は、おりからの夕日を受けて真っ赤でした。戦火で流し続けた人々の血に染まっていたのか、それとも：。弘美の絵の海は相変らず燃える赤です。でも：空の色は黒から明るい青に変わりました。

10

3月中根家

明るくなる。里子は家計簿をつけており、弘美はカンカラ三

線を弾いている。

浩一が帰ってくる。

浩一　オーッ、これがかのカンカラ三線か。  
作ってもらったの。

へえ、サマになってるじゃん。

呑んでるの。

ささやかな送別会。

弘美　誰の？

俺の。

浩一　どうということ？

今朝出がけにも話したろ、東京へ一年。

ほんと！？

お前、何も聞いてないんだから。

だって――

わかってます、沖縄ショックに季節ボケだろ。

万博ロボット開発は？

見通しついたら製造セクションに移行して、次は軍事用ロボット開発チーム。

軍事用！？

目くじらたてるな。アイテム名は軍事用に分類されるけれど、具体的には地雷撤去用のレスキューロボットのさ。

：

：

本物の人道復興支援。だって人間がやったら一歩間違えるとドッカン。

でも――

はい、でも――

どうして東京へ。

浩一　東京の電気メーカーや大学との合同プロジェクトだし、防衛庁との関係もあるしな。現地で作業するのは軍隊だから仕方ないだろ、平和貢献。

もし：もし。

今度はもし。

名目はそうでも、人殺し加担のロボット開発だったらどうするの。

そんなことはない。

ないつもり、ないはずの海外派兵が強行され、憲法九条も改悪されようとしてるんでしょ。

いつの間にか弘美はカンカラ三線を弾くのをやめて、携帯メモルのやりとりをしている。

浩一　俺は：：もちろん戦争は反対だが：：とりあえず、もう議論はジ・エンド。ジャーン！

浩一はカバンからカメラを出して里子の前に置く。

里子　えっ、これって――

浩一 シャッター押してみろ。

里子 (構えて操作) 直ってる！

浩一 カメラ屋は修理不能と言うからさ、実験室で直した。

里子 あなたが？

浩一 技術をばかにするな。

里子 していないわよ。

浩一 (激しく) 技術者をバカにするな！

弘美も驚いて浩一を見つめる。

里子 どうしたの：：ねえ。

沈黙

浩一 今日で、俺、定年扱い。明日から肩書きなしで、給料は三割カットだ。  
里子 あなた――

浩一は奥の部屋へ行こうとする。

弘美 私、四月から学校へ戻る。

浩一 弘美、父さんのことなら気にしなくていいんだぞ。グチをこぼしただけ。またがんばるから。

弘美 今ね、健さんからメールが入って、「辺野古のおじいやおばあちゃんの言葉を忘れるな。勉強するのはやさしい人間になるためだ、だから、弘美は、風のように海のように学校へ行きなさい。」

里子 風のように、海のように……

弘美 「里子さんの写真展をやるときは、帰って手伝う。必ず連絡をくれ」って。

里子 そう……そう。

浩一 写真展ね。健全財政に戻ってから考えるんだな。とりあえず風呂入る。

里子 早くやりたい！辺野古の基地計画を撤回させれるかどうか大事な時なの。沖縄以外のところで、どれだけみんなが関心を持ち反対運動を拡げていくかにかかっている。だから――

浩一は内ポケットから厚めの封筒を投げる。

里子 なに。

浩一 鉄砲玉のように出て行ったお前を迎えに行こうと、貯金を――

里子 使っていいの？

浩一 ……仕方ないだろ。(去る)

里子 (急いで封を開けるが、一枚の紙片を見つけて) 何、これ。ねえ、これ(奥へ)離婚届けが入ってるじゃない。

浩一の声 ああ、冗談だよ。

里子 だって！あなたのとこ、印鑑が押してある！

ハツとする弘美。

浩一の声 破ればいいさ。(くしゃみ) 裸になったからもう話しかけるな。

里子は、離婚届をビリビリと破る。

弘美 (空を見上げて) 月だ。半分。八日の月か。

里子 (見上げて) あれは、片割れ月。

弘美 片割れ月……

里子 母さんね、これからはあの影の分もきちんと撮るからね。

見上げる空に、ぼんやりと町の星がまたたいている。

波の音と共に栄子の次の声が流れる。

栄子の声　悲しいお知らせをします。おばあが死にました……遺影に、本人の希望で里子さんの撮って下さった写真を使いました。最後まであなたの写真展のことを気にしていました。すぐお知らせしようと思つたのですが、丁度そちらの開催日と重なっていたので遠慮しました。おばあのお気持ちを汲んだ上での判断なので許して下さいね。

この声の中で喜久、悦子、栄子、萌が喪服姿で浮び上る。

喜久　：最後まで気丈で、やさしいおばあでした。私のことをすべて承知で包み込んでくれました。テントは……私が守ります。

萌　もつと長生きしてほしい。平均寿命に満たない歳で死んでいくなんて。本当に心残りですが、最後の笑顔で救われました。

悦子　心鬱々とします。おばあは私たちの支えでした。今私は、私が生徒の支えになりたいと思っています。私、ひめゆりの語り部に応募して、今研修を受けています。まだ新米だけど、おばあのお無念を次の世代へ語り継いでいこうと決意しています……里子さん……おばあが残した最後の言葉は……命どう宝……でした。

波の音。幕が下りる。

直ぐ幕が上がると写真展会場に、呼び込みの案内をしながら健が登場。

健　ええ、「燃える美ら海——辺野古・名古屋・いま——」の写真展はこちらです。どうぞゆっくり鑑賞（という言葉につまつて）ええ、のんびり観ていつてちょうだい。あ、忘れてました。写真を撮つた中根里子さんの挨拶がありました。どうぞ聞いて下さい。

まわりに展示した写真と共に里子へ明かり、喪服である。

里子

場違いな服装で失礼します。沖縄の辺野古で私を励まし続けてくれたおばあが亡くなったので……追悼の気持ちを込めてのことです。写真をご覧になっていただく通りのもので、言葉で付け加えることはありません。ただ……カメラの視点について心に刻んだ一つのことだけお話させていただきます。

沖縄戦の記録フィルムを見て、おばあはこれは本当のことを映していないと言われました。村人が行列をなして収容所の入口に歩いていくシーンですが、入口前で米軍の撮影班がカメラを構えて住民を撮つたものです……（詰まる）

健

チバリョー！

里子！（浩一、弘美登場）

：その撮影班の後ろには何人かの米兵がいて、カメラの前を通り過ぎた村人の列から女性を引きずり出すと、茂みに連れて行って次々と強姦したというのです。もちろん、撮影班のカメラはそちらを向きませんでした……眼をそむけたくなる辛い影の部分も映して、映した本人と観ていただく人々の胸に刻み込む……この営みの積み重ねこそが、本土と沖縄の距離を縮め、基地をなくし、真の平和を築く道だと思えます。……思いの割には拙い写真ですが……どうぞご覧下さいませ。

おじい、おばあたちが浮かび上がり

たえの声

……命どう宝

———その中で静かに幕